

発刊によせて

行田市の英語活動が象徴する“これからの授業づくり”

1. トレーニングから活動に向かう“授業革命”

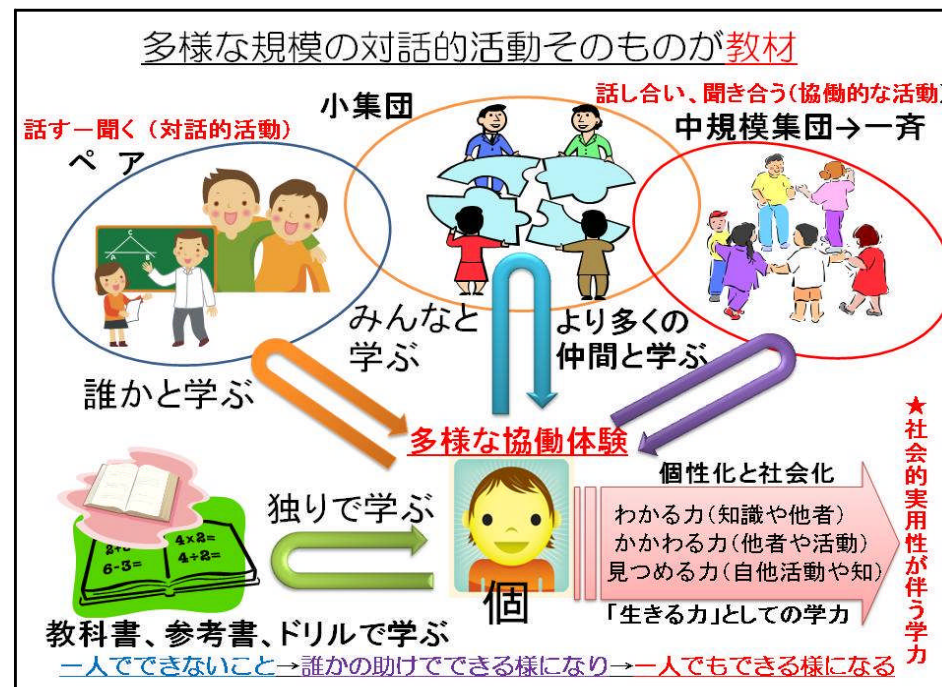
近年、様々な学びが“活動化”に向かっている。算数・数学でも活動を通じた学びが導入され、新しい指導要領でも「伝え合う、考え合う」という学習活動が推奨されている。言語と思考、思考と具体的な行為を結びつける。知と体と心を結びつける学習指導を進めるためには、教え込む、反復学習をさせるというシンプルな状況による学びだけでは不十分だ。

- ・ 具体的な場面や、状況の文脈に学びを織り込む（お店の買い物という活動に計算を織り込む）。
- ・ 知識として学ぶだけでなく、対話をする、グループで考えをつくるという体験を通して学ぶ。個に閉じた学びではなく、言葉や考えのやりとり、やりくりを通して学ぶ。
- ・ 先ず教えるという指導だけにとらわれず、子どもが持っている考え、知っている言葉を活用させる学びを行う。子どもが既に知っている言葉や知識を使わせることによって、次に覚えた言葉も使いやすくなる。

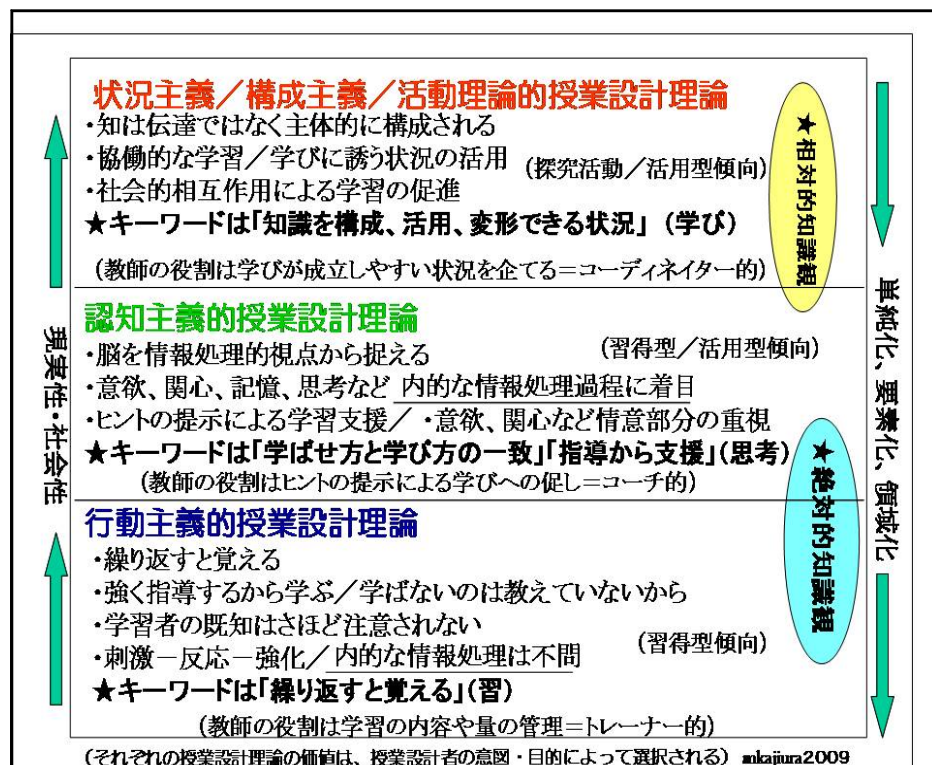
という様に、実際の対話的な活動や、言葉や考えを具体的に交換する状況の中で学ばせる授業、学習を行う必要性が高まっている。

2. 授業設計理論の変化－進化と授業づくり

旧来の、教える、繰り返させるというトレーニング的な学習に加え、考えさせたり、表現をさせたりするラーニング的学習。そ



して、話し合ったり考え合ったりする協働的な活動を通じた学習－授業が求められる時代になっている。次頁の行動主義的な授業だけでなく、新学力観以降重視された認知主義的な思想に基づく授業。更には、他者と具体的に関わったり、考え合ったり、伝え合ったりする活動を通して学ばせる状況論－社会構成主義的な考え方に基づく授業づくりが、新しい指導要領でも求められるようになってきた。英語活動の授業においても、机上の反復や復唱だけでなく、体を動かしたり、対話を通したり、ゲームの中で実際に言葉を使う活動を通して、使える英語力－伝える英語力－伝え合いの力を伸ばし、考え合うことよさを実感できる授業づくりが求められているのである。社会的活動－子どもが目的を持ちながら仲間と言葉を使い合う学び。それは、思考や判断、表現を重視



した次期指導要領を象徴する授業風景の青写真でもある。

3. 行田市の英語活動の教育的本質性

行田市の英語活動の特徴は

A／習得－活用－実用という、言語活動の要素がバランス良く組み込まれている。

B／身体活動や、文化的国際性に触れさせるゲーム、子どもの身近な生活に関わる多様な活動を通して、五感を刺激しながら学習の意欲と効果を高めようとしている。

C／教師－指導者－学校間連携という「協働的な体制」によって、授業づくりが構想－実践－評価されている。

という点にある。

このことは、英語活動のみならず、これからのあらゆる授業設計－実践において極めて重要な意味を持っている。

- ①単純な語彙習得を中心とした活動の寄せ集め、再構築ではない。
- ②学習活動と語彙、教師が見取った子どもの発達段階に適合した対話の文脈（ゲームや問い合いなど）を連携させた活動内容になっている。
- ③既習を把握し、スパイラルに学びを深め・広げる内容構成を研究している。
- ④6年間に亘り、指導者と実践者がアクション・リサーチを行いながら、協働的に構成－実践－評価をして改善を重ねている。

こうした、授業づくりのスタンスや具体的な活動は、今後のあらゆる授業づくりにおいても教育の本質に迫る活動の具体例だと言えよう。授業の実践は「創り合う」「使い合う」「直し合う」という生産的且つ協働的な活動によって、より質の高い教育資源となる。カリキュラムや授業は、それを使い合い、直し合う教師の活動の質を反映する性質を持つ。また、授業はそれを創り、使う者自身を育てる力も持っている。

行田市の英語活動の質の高さは、この活動を生みだした教師－指導者の教育活動の質の高さを象徴しているのである。

平成22年2月

教育報道出版社 梶浦 真